

伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子 編著

『欲ばりな女たち』

—近現代イギリス女性史論集—

彩流社、2013年2月刊、四六判、400頁、3500円

本書は、津田塾大学言語文化研究所に設置された「女性・都市・モダンティ」研究会による研究成果をまとめた、近現代イギリス女性史に関する論文集である。研究対象となっているのは18世紀から20世紀を生きた女性とその活動であり、従来日本ではあまり着目されてこなかった人物に焦点が当てられている。

それでは本書の内容を簡単に紹介してみよう。全体は「知に挑む」「生を織りなす」「人をつなぐ」という3部に大きく分かれており、これらのテーマに沿った論文が10編収められている。第I部「知に挑む」では、もっぱら男性に独占されてきたと思われていた著述業や学問の領域において活躍した女性たちが取りあげられる。第1章「書く女たちの野望」（梅垣千尋論文）では18世紀後半に増加し始めた女性著述家が、第2章「歴史を紡いだ女性たち」（伊藤航多論文）では19世紀に歴史を探究ないし叙述した女性たちが、第3章「医師登録制度とインドの恩恵」（出島有紀子論文）では19世紀後半から20世紀初頭にかけて登場した女性医師が、それぞれどのように立身を図っていったのかが明らかにされる。

第II部「生を織りなす」では、女性に割り当てられた空間であるとされてきた家庭生活と家政の営みが、より広い社会的活動に接続される可能性を有していた状況が指摘される。第4章「消費者としての女性」（真保昌子論文）では18世紀末から19世紀前半にかけて家具調度品購入に際して女性が有していた影響力、第5章「刺繍の価値を高める」（成田美美論文）では19世紀後半の女性たちにおける刺繍のあり方、第6章「子育て支援体制の構築をめざして」（三井淳子論文）では世紀転換期に構築されていった母親たちのネットワーク、第7章「C・S・ピール夫人が描いた食の近代化」（菅靖子論文）では第一次世界大戦中にピール夫人によって取り組まれた食文化の改善運動と、各々の領域で家庭と社会が結びつけられてゆく過程が論じられている。

第III部「人をつなぐ」では、女性であることを逆手にとり自らが社会的結節点となることでその影響力を高めていった人びとの姿が活写される。第8章「教区のアイドルから教区の女王へ」（山口みどり論文）では19世紀後半の牧師館の女性たちが、第9章「チャーミングな黒幕」（坂口美知子論文）では世紀転換期における社交界のホステスたちが、第10章「政治運動に親しむ女性たち」（佐藤繭香論文）では女性参政権運動に取り組んだ舞台女優たちが、各々の手法で人的紐帯を築き上げてゆく姿が描き出されている。

イギリスにおいて女性が本格的に歴史学の対象と見なされるようになったのは、第二派フェミニズムが台頭した1970年代であった。大部分が左翼活動家でもあった女性史家たちによって担われたこの時期の女性史研究は、多分に政治的な意図と結びつきやすく、そのため女性解放史としての側面が強くなりがちであった。しかし1980年代に入ると、ジェンダー概念の導入とポスト構造主義の影響により、歴史的に構築されてきた「女性」というカテゴリーが生成される過程を明らかにすることこそが女性史ないしジェンダー史の課題であるという主張が現れ始めた。

こうした実証主義と構築主義との相克は、1990年代に大きな議論を呼んだ。しかし、そもそもどちらかの方法論を二者択一的に選択すること自体に無理があったのであり、むしろ両者は表裏一体のものとして認識し直す必要があるだろう。言語論的転回以後の議論を踏まえれば、人間による思考の枠組みは文化的・歴史的産物である言語によって規定されるのであり、それゆえそれぞれの状況に置かれた女性たちも同時代における「女性」というカテゴリーを意識して行動せざるをえないからである。

このように考えてみると、本書はポスト構造主義の成果を取り入れつつ、歴史的主体としての女性たちの実践を巧みに描きだすことに成功しているといえる。各章に登場する女性たちは、性別により規定されていた「公的領域」と「私的領域」という同時代の規範を無視したり拒絶したりしているわけではない。こうした社会通念を念頭に置きつつ、むしろそれを戦略的に逆用することで、自己実現の達成を目論んでいるのである。これまでさほど明確に意識されてきたとはいえない視点を自覚的に採用して編まれた本書は、日本におけるイギリス女性史研究に新たな展望を開くものといえよう。（仲丸英起）